Title	tory of Academic resouces 学級編成替えの交友関係並に地位に及ぼす影響:ソシオメトリイーによる一研究
Sub Title	Effects of reorganization of school classes on friendship patterns among class-mates and their
	sociometric status
Author	佐野, 勝男(Sana, Katsuo)
	関本, 昌秀(Sekimoto, Masahide)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1956
Jtitle	哲學 No.32 (1956. 3) ,p.A173- A218
JaLC DOI	
Abstract	Sociometry in the narrow sense that has been developed by Moreno, Jennings and their collaborators for the purpose of measuring and analysing the phenomena of human relations is considered to have two approaches. One is that which takes up a group as a whole and emphasizes the description and analysis of group structure and developmental processes. The other is that which takes up the individual as a group member and attempts to show how his personality is projected in the choice process, his status in the group, etc. The present investigation has tried to clarify the effects of school class reorganization on friendship patterns among class-mates and their status, by means of a spciometric test, in view of both the above-mentioned two approaches. For this investigation, three sociometric tests were administered to high school boys and girls during the period from the third tern of the first year to the third term of the second year. The first test was given at the end of the third term of the rescond year. Classes were reorganized when the high school pupils were promoted from the first year to the second year. For the criteria of choice in this sociometric test, three situations were selected, namely "to play with", "to study with" and "to have as best friend", which were considered to be the most significant in high school life. The subjects were free to choose without limitation. The degrees of intensity of choice were shown in such a manner as to combine the special choice, "I like (or dislike) him: "The following results were obtained from the investigation based on the foregoing plan 1. Effects of reorganization of classes on friendship patterns among class-mates. (1) For every criterion, friendly relations were established earlier than hostile relations in the new classes, after the reorganization of classes on friendship patterns among class-mates. (1) For every criterion, friendly relations were established earlier than hostile relations of large numbers of friendly relations over a wide range and at t

	have as best friend", however, kept the relations as they had been. (9) For both criteria of "to play with" and "to have as best friend", the mutual relations showed changes even with the mere passing of time without such a violent change of circumstances as the class reorganization. However, the changesin this case were more slight than in the case that the reorganization was introduced (10) Even when the mutual relations showed changes merely with the passing of time, it was found that the stronger the relations, the more stable they were and the less they were liable to change; the weaker the relations, the more unstable they were and the more they were liable to change. I. Effects of reorganization of school classes on pupils' status. (1) Analysis of the changes in pupils' status was made only for the criterion of "to play with". (2) Throughout the three tests about two-thirds of the pupils experienced changes in status in some way or other. (3) For more than half of them, status immediately after the reorganization of classes (or at the time of the second test) was only tentative and was transformed gradually to a stable condition with the formation of mutual awareness among them. (4) Subsequently, many of them returned to the status which they had occupied before the reorganization of classes. (5) However, a rough classification of their status was achieved almost immediately after the reorganization of classes. Thereafter, few of them exhibited extreme mobility (e.g., from "star area" to "low status area" or vice versa). (6) The pupils who received either the highest or the lowest status in the new classes occupied their fixed status earlier than the others after the reorganization. (7) Changes in status due to reorganization appeared to occur more often with pupils in the middle status than with ones in the high or low status positions in the original classes. (8) Even when the reorganization had taken place, few of them changed their status radically from "star area" to "low status area" or vice versa.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000032- 0197

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学級編成替えの交友関係並に地位に及ぼす影響

ソシオメトリイーによる一研究

2 相互選択数の変化

関

本

秀

佐

野

勝

男

I

序

調査目的及び調査手続き

3 学級編成替え後の交友関係の内容

交友関係の強度と学級編成替えの影響

5 学級編成替え以後の交友関係の変化

学級編成替えの生徒の地位 (status) に及ぼす

影響

地位の規定

「遊び」の基準に於ける地位の変動

3 スターの二類型

調査結果

3 2

選択の強度 選択許容数 四

調査方法

調査の時期並に経過

調查対象

調查目的

1

選択規準

学級編成替えの交友関係に及ぼす影響

1 選択数の変化

学級編成替えの交友関係並に地位に及ぼす影響

IV 要

約

七三

l 序

S. によって構成された社会的距離の尺度のような人間間の特殊な態度についての測定技術、 地位の測定尺度等さまざまな制度的行動の測定に関する理論や方法も含められるし、またボガーダス Bogardus, E. 中にはドッド Dodd, S. C. がシリアの農村に試みた衛生的行為の測定尺度やチェピン Chapin, E. S. の社会経済的 nings, H. H. 及びその協力者達が一般に人間関係現象の測定と分析に用いてきた狭い意味でのソシオメトリーを問題 々な生態学的指数の測定技術をも含めることができる。しかし、ここではモレノ Moreno, J.L.、ジェニングスJen-ソシオメトリー Sociometry とは広い意味では社会現象一般の測定に関する理論や方法を指すものであって、その 更にコミニュテーの種

にすることにする。

survive?"が刊行されて以来のことである。それ以後僅か二十余年の間にこの方法は著しい発達を遂げ、今日では 述評価し、且つ説明せんとする方向である。他の一つは集団成員の地位並に選択過程よりみられるパーソナリティー われてきた諸研究を整理してみると大略二つの研究方向に分けられそうである。その一つは集団特性に関する指標と 産業、軍隊、その他さまざまな分野にわたっている。これら各分野に於いて従来ソシオメトリー研究の名のもとに行 を占めるに至っている。そしてその応用範囲も純学術的研究(特にスモールグループの研究)を超えて、教育、社会、 社会心理学の領域の中でグループ・ダイナミックス Gronp Dynamics と共に、軽視することのできない重要な位置 して用いられる方向である。即ち、研究の焦点を集団それ自体に合せ、集団構造の特性やその発展、 さて、狭義のソシオメトリーが社会心理学に於いて注目されてきたのは一九三四年にモレノの"Who shall 崩壊の状態を記

tion pattern 場合では学級編成替え)の条件を加えた時、ソシオメトリーで測定しておいた人間関係や成員の地位等(この場合は 完全な理解のためにはこの両研究方向が同等の重要さをもって共に採用されてゆかねばならないであろう。本研究は 交友関係と生徒の地位)がどのような変化を蒙るか、また各成員の地位の変動の仕方と彼の相互作用の型 従来行われてきた研究の多くはその研究目的の性格によってこの両研究方向を使いわけて用いているが、集団のより 上げられるようになったのはジェニングスによって行われたニューョーク州立女子少年院の研究以後のことである。 前者の研究方向はソシォメトリー研究の初期の頃から既に数多く取上げられてきたが、後者の研究方向が本格的に取 ソシオメトリーに於ける斯様な二つの研究方向を不完全ながらも、共に考慮しながら、何等かの形の社会変動(この 係や集団内に於て取交される選択過程の心理的性格から彼のパーソナリティーを解明してゆこうとする方向である。 評価の方向である。即ち、研究の焦点を集団それ自体よりも寧ろ集団内の個人に合せ、集団に対する各成員の位置関 モレノの言う社会的アトム social atom) との間に如何なる関係が存するかを次の如く調査せんと試(26) (interac-

みたものである。

Ⅱ 調査目的及び調査手続き

一調査目的

髙校入学後一年間の学級生活を通じて形成された学級集団が、二学年に進級すると共に学級の編成替えという新し

い事態に直面する。この学級の編成替えが行われることによって、

1 従来結ばれていた交友関係がいかに崩壊し、また編成替え以後の新学級において新しい交友関係がどのような

過程を経て形成されてくるだろうか。

2 編成替えの前後に於いて、各成員のソシオメトリー上の地位がどうような変動を生ずるか。また、 その変動の

仕方と各成員が示す相互作用の型との間にいかなる関係が存するだろうか。

本研究は以上の如き諸問題を解明せんと試みた。

一 調査対象

東京都立の某高等学校一年生全員八学級(一学級五十名前後)、総計約四百名。

三調査の時期並に経過

六月に行われた。最後の第三回の調査は一九五三年三月に行われた。この時期は新学級を編成してから約一一ヵ月を 第二回の調査は、この一年生が学級編成替えを経て二年生に進級し、新学級を形成してから約二ヵ月後の一九五二年 れた。第一回の調査は一九五二年三月に高等学校入学後約一一ヵ月を経た一年生全員八学級を対象として行われた。 この調査は第1図に示されている如く一九五二年三月から一九五三年三月までの一年間、 前後三回にわたって行わ

2月

1953年4月

置によって、

A組と 田組

がなされたので、やむを

級にして欲しいとの要請

えず次のような便宜的処

逆に、第二回

の

調査時には、

(二年一学期の調査)

畤

時にスタ

1

の

地位を

回調查

の第二回

調査から九ヵ月

経過しており、

また前日

回

る。

但し、

この回は学校

を経た時期にあたってい

当局

から調査対象を二学

ると思われる「勉強」 「遊び」「親友」 の三場面を考え、 それぞれ 「遊び相手として」「勉強相手として」「自分の喜び 面 に於て、 最も重要な機能を演じてい

学級編成替えの交友関係並に地位に及ぼす影響

させることにした。誰五 や非しみを相談したり、 心の中を打あけられる相手として」、誰を選ぶかの三基準を適用し、牽引、反撥の選択を表出

(choice status) を占めるものに就いての分析は比較的可能であっても、中程の地位や低い地位を占める成員の地位 このように選択の人数を制限すると、成員の選択が一部のスターに集中する傾向があるため、その集団の高い地位 及び相互的交友関係を明瞭に映し出すことは難かしい。 それ故、 選択許容数 従来のソシオメトリック、テストでは選択の人数を三人乃至五人に制限しているものが多い。 本調査に於ては選択を無制限に行 わせる ことにし

た。

うと試みた。 ^{誰六} な人に○をつけなさい」と選ばせる方法をとった。更に級の者のうち、誰が自分を好きと選んでくれるかという予想 強度を表わそうとしているものが多いが、本調査に於ては選択数を無制限に許容した関係もあり、「特に好き(嫌い) の質問(通常のソシオメトリックテストの逆問に当る)に回答させる方法を加えて、これにより選択の強度を表わそ 3 選択の強度 従来のソシオメトリーでは第一選択、第二選択と順序をつけて選択させることにより、 選択の

るため、常に他学級に選択の相手がいる場合はそれを自由に選ばせた。テストの所要時間は約五〇分で、隠し番号に この調査に限り勉強の選択基準に於ける質問を削除した。 より無記名で行われた。尚第三回の調査では全ての選択に対し選択理由を記入させた。その為に時間的制限を受け、 その他、他学級(但し同一学年)の生徒との交友関係が、学級編成替え前後において結ばれているかどうかを調べ

11 調査結果

調査結果の分析は、 学級編成替えの交友関係に及ぼす影響と、二 学級編成替えの生徒の地位に及ぼす影響の

二つに分けて行った。

一 学級編成替えの交友関係に及ぼす影響

数の二倍近くの数を示している。反撥数もこの時期には再び多く取り交わされるようになる。この第三回の調査結果 係が形成されてゆくことがみられる。また、編成替え後一一カ月を経た時期の牽引数をみると、編成替え直後の牽引 れに比して激しい。 少くなっている。この事から、学年の変り目に学級編成替えを実施すると、生徒達の面識の範囲は広まり、或る期間 を編成替え以前の第一回の調査結果と比較すれば、一人平均の牽引数は遙かに多くなり、逆に、一人平均の反撥数は を経ると交友関係は広範囲に数多く形成され、逆に反撥関係は減少してゆくことが推察される。 ってどの基準の選択数も減少の傾向を示している。だが、牽引数の減少率は比較的緩慢であり、 (牽引数と反撥数の両者) にどのような変化がみられるかをみると、第1表の如くである。全般的に、 1 選択数の変化 新学級が編成されると、互に反撥し合う敵対的関係よりも先に互に協調し合おうとする友好的関 先ず概括的に、編成替え以前とその直後と では (第一回調査と第二回調査の比較) 反撥数の減少率はそ 編成替えによ 選択数

交友関係 相互選択数の変化 (mutual relation) 次に以上の牽引数と反撥数の増減がどのように相互的選択 の増減に関係しているかみることにする。相互的反撥 (mutual repulsion) (mutual choice) の方は極 や相互的

学級編成替えの交友関係並に地位に及ぼす影響

第1表 同一学級内で取交された選択数 (牽引数と反撥数)

3			·				
	第3回	回。	o A 路	第1回	数	河 岭	TH
	2年3学期 (A組とH組)	2年1学期 (A組とH組)	2年1学期 (8学級)	1年3学期 (8学級)	強	滋滋	選択
	10.8	6.8	7.7	8.6	ω	栅	遊
1	2.7	1.6	2.2	2.6	5	<u>2</u>	
١	0.8	.1 5	1.5	1.9_	C	数	
	2.0	1	1.2	2.5	b	সা	
: ,	0.2	1.1 0.2	0.3	0.6	۵,	嬓	Ġ.
	0.4	0.2	0.2	0.6	ဂ	数	
		3.7	4.0	5	ಶ	栅	
		0.9	1.4	1.6	o	ਭ) 档
		0.8_	0.8	1.0	c	数	
			0.8_	1.9	b	য	
		0.8 0.1	0.2	0.5	ο,	螆	凝
		0.3	0.2		G ·	数	
	2.8	1.6	1.9	0.4 2.3	ß	M	
	0.8		0.6	0.7	5	9	鑑
		0.4 1.0	0.9	1.4	C	数	
	<u></u>	0.8_	0.8	1.4 1.8	b	凤	
	0.6 1.1 0.1	0.1	0.1	0.4	D *	反撥数	枚

- 1. a は 普通の牽引数,或は反撥数。(一人平均)
- aのうち「特に好き」,或は「特に嫌い」といふ強度で選ばれた牽引数と反撥数。(一人平均)
- 7 「相手から選ばれるだろう」という予想の牽引数と反撥数。(一人平均)
- 2. 第1回, 第2回の上段の各行の数字は8学級の一人平均選択数。

第2回下段,第3回の各行の数字はA組とH組の一人平均選択数。

ゆく。 く少く、ここで改めて採り上げる程のものではないので主として相互的牽引 相互的交友関係には第2図に示されている如き強度の異った一 五種類の交友関係を組合すことが出来る。 mutual attraction) について述べて

第2図 相互的交友関係の 強度の分類

59	は度の分類
結合強度 番 号	結 合 強 度
	<u> </u>
1	© ———
1	©
	<u> </u>
2	© ——O
2	© •
	©
3	• ——•
J	⊚
	00
	◎ ——●
	O
4	●
	0
	•
5	non-mutual

5 non-mutual
(註)◎「特に好き,而も相手からも選ばれるだろう」
◎「特に好き」

- ◎「特に好き」◎「好き,而も相手からも 選ばれるだろう」○「你*」
- ○「好き」●「相手は自分を選ぶだろう」

ループログログ はお互従って,◎ ――― ◎ はお互に「特に好き」で選んでいるような相互的交友関係を表す。

る。 交友関係の頻数は減少を示しており特にその傾向は 時の相互的交友関係数の変化は、 さて、 おいては1、 言葉使いを簡単にするため、これを単に「交友関係」と呼ぶことにする)の変化及び編成替え直後と第三回調 学級編成替え直前と直後の相互的交友関係数 2のような強い結合度で結ばれている交友関係は少くなり、 第2表(a)と(b)に示す如くである。これによると、 「親友」 (以後に取扱う交友関係は主としてこの 相互的交友関係で の基準に於て著るしい。 逆に3のような弱い結合度で結ばれてい また各規準とも、 編成替え直後は、 編後替え直後 明ら か 査

の強度の段階を作った。

以後、

五

に第2図の如き四種類の強度にまとめあげ、それに全然相互的交友関係のない「無関係」を加えて五種類の交友関係

この五種類の強度段階に従って分析を進めてゆく。

種類の関係を十人の心理学専攻者に示し、その交友関係の強度によってランキングをさせ、

その結果に基き、

更

学級編成替えの変友関係並に地位に及ぼす影響

哲

第2表 (a) 学級編成替之直前 (第1回調査) と直後 (第2回調査)の相互的交友関係数(8学級)

l						
	囯	第2	亘	第一	回数	體例
4	,	1年3学2年1学		年 3 学	98	選択基準
		越		越	8 強係 疾	
V 444 V	218 (32.5)	132 86 435 19 672 54 30 124 (19.7) (138) (64.7) (2.8) (100) (22.6) (12.5) (51.9)	285 (39.1)	180 105 401 43 729 64 3.8 134 (24.7) (14.4) (55.0) (5.9) (100) (22.9) (13.6) (48.1)	 	
- TT	82.5)	86 (138)	39.1)	105 (14.4)		遊
		435 (64.7)		401 (55. 0)	<u></u> မ	~
<i>क</i> रूल ० ४		19 (2.8)		43 (5.9)	4	Ċ.
# }		672 (100)		729 (100)	<u> </u>	
・ (* 4) * 4) * 4) * 5) * 6) * 6) * 6) * 7)	84 C	54 (22.6)	102 (36.5)	$\begin{matrix} 64\\(22.9)\end{matrix}$	jA	
キャイ枯く	84 (35.1)	30 (12.5)	36. 5)	3.8 (13.6)	22	倉
N		124 (51.9)		134 (48. 1)	ယ	
		31 (13.0)		43 (15. 4)	4	路
		239 (1 ₀ 0)		279 (100)	芈	
	46 (37 (31.6)) 16	58 · (31. 6)	-	
	46 (39.3)	(7.7)	91 (49.5)	33 (17.9)	100	繼
		56 (47.9)		70 (38. 0)	ယ	
		$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$		43 279 58 · 33 70 23 184 (15.4) (100) (31.6) (17.9) (38.0) (12.5) (100)	4	女
		(100)		184 (100)	mh	

註 1. この数字は A 組から H 組迄の全 8 学級についての総計である。

交友関係の強度の欄の 1, 2, 3, 4 の数字は相互的交友関係の強度を表す。

3. () 内は合計に対する%を表す。

10

る交友関係の占める割合は高くなっている。この傾向もまた、「親友」の基準に於て顕著にみられる。 上廻る増加率をもって交友関係の類数を増加させている。而も、その増加の傾向は1、2のような強い交友関係に於 次に、編成替え直後と第三回調査の両結果を較べてみると、今度は逆に各基準とも編成替え当時の減少率を遙かに

張が生徒間に数多くの強い交友関係を取り結ぶことを容易ならしめるという既述の結果る裏付けするものである。ま

て著しくみられる。この事実は、学級編成替えは生徒の面識範囲を拡め、而も或る期間を経ると、この面識範囲の拡

第2表(b) 学級編成替え直後(第2回調査)と第3回調査時の相互的交友関係数

(A組とH組)

		.40.42.44.44.4	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		
国	総 い	亘	第2	回数	體和
	3 年 3 学期	,	2 年 1 学期	の変数を変数を表現し、	透択基準
65 (29.6)	42 (19. 0)	35	18 (11.7)	 -	
29.6)	23 (10.4)	(22.7)	17 (11.0)	2	孫
	143 (64.7)		112 (72.7)	ယ	
	13 (5.9)		7 (4.6)	44	Ċ,
	221 (100)		154 (100)	nih	
16 (12 (23.1)	8	(16. 2)	1	
(30.8)	(7.7)	(26. 0)	3 (9.8)	2	機
	30 (57.6)		15 8 (48.6) (25.4)	ω	14.1
	$\begin{array}{c c} 4 & 30 & 6 \\ (7.7) & (57.6) & (11.6) \end{array}$		8 (25. 4)	,42	女
	52 (100)		31 (100)	<u> zuli</u>	

註 1. 各数字は A 組と H 組の 2 学級についての総計である。

2. 他の點は第2表(a)の點と同じ。

たどの回の調査に於ても「親友」の基準では交友関係の頻数が少いが、反面、結合度の強い交友関係の占める割合が

他のどの基準よりも高くみられる。

前学年で同一学級に所属していた生徒同志の交友関係数の占める割合は第3表の如くである。この表によれば、編成 替え直後の新学級に於いて、前学年に同一学級であった生徒同志の交友関係の数は「遊び」の基準に於いて全交友関 学級編成替え後の交友関係の内容 学級編成替え直後の調査(第二回の調査)に於ける全交友関係数の中、

学級編成替えの変友関係並びに地位に及ぼす影響

調査)と第3回調査時における交友関係の内容

	「勉		強亅			「親		友」	
2	2	3	4	計	1	2	3	4	計
54 (63. 0) 34	30 (60.0) 18	124 (45. 2) 56	31 (71.0) 22	239 (54. 4) 130	37 (75.7) 28	9 (66.7) 6	56 (60.7) 34	15 (66.7) 10	117 (66.7) 78
8. (25.0) 2	(50.0) 1	34 (29. 4) 10	12 (58.3) 7	56 (35.7) 20	5 (40.0) 2	3 (33.3) 1	15 (33.3) 5	(50.0) 4	31 (38.7) 12
					12 (41.7) 5	(25.0) 1	30 (46.7) 14	6 (33.3) 2	52 (42.3) 22

の頻数

もの同志の相互的交友関係の頻数

相互的交友関係数に対する同一学級の生徒の相互的交友関係数の割合

AM監

新学級の全生徒の間で結ばれる相互的交 友関係の可能数 前学年に同一学級に所属していた生徒の 間で結ばれる相互的交友関係の可能数

× 100

形成される傾向がみられ、而もこの傾向は「親友」の基で第3表にあらわされている実際の調査資料から得られた当初は、以前に同一学級であた数字と比較してみると、後者の方が遙かに大きな数字を第3表にあらわされている実際の調査資料から得られの式に従って、算出すると一七・〇%となる。この数字の式に従って、算出すると一七・〇%となる。この数字

を

関係なく交友関係が無作為に形成されるものと考え、

そ

仮に、前学年に於いて同一学級であろうとなかろうとに

親友」の基準に於いて六六・七%を占めている。

いま

ばれる交友関係数の全交友関係数に対する確率的な割合

の条件の下で前学年に同一学級にいた生徒同志の間に結

八四

「勉強」の基準に於いて五四・四%、

係数の四七・三%、

は

何の交友関係もなかった生徒同志も、

新学級

K

なることが推察される。

(この点に関する更に詳しい分析は次の項に示される。)

され易いという傾向がみられる。

いまこころみに、

同

関係程前学年に同一学級であった生徒同志によって形成

表に示される如く、

いずれの基準に於いても、

強い交友

学級であった生徒同志が結んでいる交友関係数の、全交

友関係数に対する割合を強度1と強度3について比較し

準に於いて著しくみられる。

次に、各強度の交友関係についてみると、同じく第3

		•				•
	基準		「遊		び亅	
調查	交友関係の 強度	1	2	3	4	Ħ:
第	2年1学期 (A~H組)	132 (58.3) 77	86 (57.0) 49	435 (41.8) 182	19 (52.6) 10	672 (47.3) 318
回	2年1学期 (A組とH組)	18 (44. 4) 8	17 (58.8) 10	112 (42.0) 47	7 (42.9) 3	154 (44.2) 68
第 3 回	2 年 3 学 期 (A組とH組)	42 (40.5) 17	23 (60.9) 14	143 (30.1) 43	13 (46.2) 6	221 (36.3) 80

1. 各欄の上の数字は新しい学級で結ばれた全相互的交友関係 註

てみると、

- 2. 数字は上の数の中,
- 3.
- 「勉強」の基準の第3回調査は省略された。 4.

事が言える。

以上によって、新学級が編成されると前学

される傾向が強くみられる。

強度2と3についても同じ

度1の交友関係の方が同一学級の生徒同志によって形成

親友」の基準では七五・七%対六〇・七%となり、強

「遊び」の基準では六三・〇%対四五・二%、

年に同一学級にいて、何らかの交友的関係を結んでいた

生徒同志の多くは、その関係をそのまま、

或いは更に強

結合に発展させて新学級に持ちこみ、 又前学年の時に

共に編成されることによって新たに交友関係を結ぶ機会を得るよう

八五

数及び他学級の生徒同志の交友関係の数は編成替え以前の第一回の調査の場合より遙かに大きな数を示していた。 なる。 てみると、1、2のような強い交友関係はまだ同じ学級にいた生徒同志で結ばれる傾向が強く、前学年に他学級であ 生徒がある期間共同生活を行い、互に他の生徒を熟知するようになるにつれてこのような傾向はどう変ってゆくか。 このことが次に問題となってくる。第三回の調査を行ったA組とH組について この 点を観察して みると、 は殆どそのまま保持されている 調査とを比較すると、前学年に同一学級であった者同志が結ぶ交友関係の全交友関係に対する割合の減少は、 に示すような結果となる。 関係がぼつぼつ現われてくるが、まだまだ同一学級の生徒同志が交友関係を結び易い傾向は残っていることがうかが いては三・九%であるのに対し、3に於てはその三倍、一一・九%となっている。これらの結果から、編成替え後、 った生徒同志の交友関係が多く増加するのは3のような弱い交友関係に於てである。即ち、 一七・○%よりは遙かに高い数字を示している。つまり、第三回の調査の頃には、他の学級であった生徒同志の交友 一カ月の期間を経るうちに、前学年に他学級にあった生徒同志も互に相手を認知し合い、 た同一学級者同志の交友関係数は、第三回の調査に於いて三六・三%に減少している。交友関係の強度を問題にし た生徒同志の交友関係の割合が三六・三%に減っているとは言え、その割合は既述の数式で算出した確率上の割合、 而もこの傾向は3のような比較的弱い交友関係に於て強くみられる。 編成替え直後の調査にみられたこのような傾向がどの程度まで持続されるものか、新しい学級に編成された 編成替えによって異った学級へ離れ離れになった生徒同志の交友関係の推移をみると、強い結合の交友関係 先ず「遊び」の基準では、編成替え直後の調査に於て全交友関係数の四四・二%を占めて (段々この交友関係は解消してゆくが)。 第二回の調査で他学級の人を選んでいる頻 尚、 第三回の調査に於いては同一学級に 交友関係を形成するように 第二回の調査と第三回の 1につ 第3表

われる。 次に「親友」の基準に於ては「遊び」の基準とは逆に同じ学級であった生徒同志の交友関係が、 第三回の調

査に於て幾らか高くなっているのがみられる。

た。従って、この項では更に分析を進めそれぞれ異った強さで結ばれている交友関係が、学級編成替えの影響をどの 徒達はどういった種類の交友関係をどの程度に形成し、それをどのように発展させてゆくかを大まかに 一覧 して ように違った形で受けているかを考察し、 交友関係の強度と学級編成替えの影響 編成替えの学級構造に及ぼす影響をより一層はっきりさせたいと思う。 これまでの所では学級編成替えによって新学級が編成されると、生 ż

はどう変化してゆくか。 が、学級編成替えによって異った学級に離れ離れに編成された場合、その交友関係は編成替え直後の第二回の調査の えによって再び同じ学級に編成された場合、その交友関係は編成替え直後の第二回の調査の時にどのような変化を蒙 時にどのように変化しているか、その変化の様態が結合の強度とどのように関係しているか。 てその交友関係はどう変化してゆくか。二、第一回の調査の時、 っているか。 この問類は次のように分けて考えると便利である。 その変化の様態が結合の強度とどのように関係しているか。また期間が過ぎるに従って、その交友関係 -- 第一回の調査の時、 何らかの交友関係を結んでいた生徒が、 何らかの交友関係を結 んでいた生徒 また期間がたつに従っ 学級編成替

ゆき、 るという事を述べるにとどめておく。 い相互的交友関係はそのまま存続する傾向がみられる。 編成替え後一一カ月を経た第三回の調査では、 一の問題については、編成替えによって異った学級に別れ別れに編成されても編成替え直後においては強 よほどの強い交友関係でない限り、 ところが、その交友関係も期間がたつにつれて序々に薄れて 殆んど消滅してしまってい

学級編成替えの交友関係並に地位に及ぼす影響

2年1 1 3 年学 期	1	2	3	4	5	計
1	29(33, 0) (37.6)	12[13.6] (24.5)	16(18.2) (8.6)	0 (0) (0)	31[35, 2] (2, 7)	88 [100] (5.9)
2	10[23.3] (13.0)	3 [7.0] (6.1)	(例) 14[32.6] (7.6)	1 [2.3] (14.3)	15 34.8) (1.3)	43 [100] (2.9)
3	12[10.3] (15.6)	11 [9.4] (22.5)	24[20.5] (13.0)	0 [0] (0)	70[59.8] (5.8)	117 (100) (7.9)
4	1 (6.7) (1.3)	0 (0)	1 (6.7) (0.5)	1 (6.7) (14.3)	12[79.9] (1.0)	15 (100) (1.0)
5	25 [2.0]	23 [1.9]	130(10.6)	5 (0.4)	1042(85. 1)	1225 [100]

(70.3)

(100)

185[12]

第4表(a) 学級編成替え前後の交友関係の変化(遊び)

(例) 第二行第三列の 14 といふ数字は学級編成替え直前に2の強度の交友関 係を示していたが、編成替え直後には3の強度の交友関係に薄らいでし まつた交友関係の頻数を表す。その傍の[32.6]といふ数字は編成替え直 前に2の強度で結ばれていた交友関係の中、編成替え直後に3の強度の 交友関係に変つてしまつたものの%を表し、(7.6) といふ数字は編成替 え直後に3の強度で結ばれている交友関係の中、編成替え直前に2の強度の交友関係を示していたものの%を表している。

その減

少

率が

高

い

と

いう事

は既に述べ

た通

ŋ

で

ある。

だがこのよう

な

般的傾向にも拘ら

VI

た生徒同志の

交友

友関係

の

数が

減少

屾

も強

交友関係

ほど

が

新

たに形成されると、

その当初は

般

に交

(71.4)

(100)

7 [0.5]

(89.2)

1170[78.6]

よっ

てみられる。

先ず

遊び」

の基準

からみ

(100)

れ

ば、

強

交友関係ほど編成替えの影響をあ

まり蒙ってい

ない。

編成替えによって新学級

(82.3)

(100)

1488 [100]

でが、 ず、 関 交友関係 ど消滅し とを示 係 の強度で結ばれてい に 前学年に同じ学級 編成替え直後もやはり1、 つ にくい は比較的編成替えの影響を受け いては、 7 VI 傾向が る。 逆に強 例 えば、 みら K た交友関係の約半分ま V. れる。 結合の交友関 編成替え以前 即 2のよう ち、 係 難 強

5

計

(32.5)

(100)

77 [5.2]

(46.9)

(100)

49 [3.3]

友関係 ても再び同じ学級に編成された生徒同志 さて、 の 次に 変化は第 第二 4表 0 問 題、 a) 即 ち、 (b), (c) 新学年に於 の

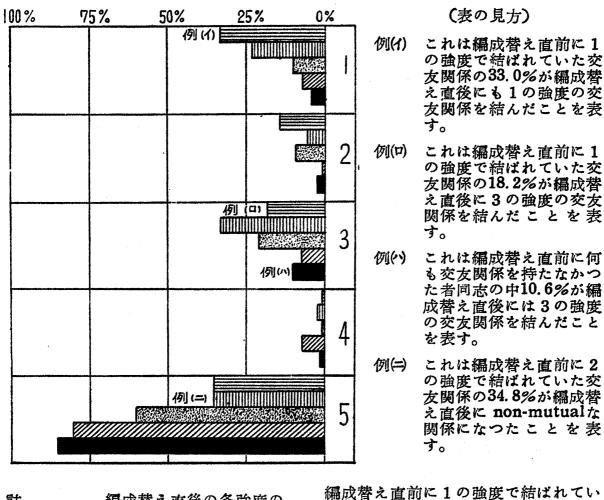
行の やや強く編成替えの影響を受けているが、やはりその中の三〇・三%は1、2のような強い交友関係に留り、三二・ 六%は3の強度の交友関係を保っている。全然交友関係を解消してしまったのは1の強度の交友関係の場合と同じく 交友関係に変ったものは全体の僅か一九・七%で、全体の六○%近くが編成替え直後に交友関係を全然解消してしま しまい、1、2のように強い交友関係を結ぶようになったのは僅か六・七%にしかすぎない。 っている。強度4の交友関係に至っては更にひどく、編成替え直後に大部分(約八○%)がその交友関係を解消して 三四・八%しかみられない。これに対し、 強い交友関係を保っており、全然交友関係を解消してしまったのは僅か三五・二%にすぎない 内の数字を横にみてゆく)。編成替え以前に2の強度で結ばれていた交友関係は1の強度の交友関係より 3の強度の交友関係をみると、編成替え直後に1、2のような強い結合の (第4表 a

編成替え以前に1や2の強さの交友関係をもっていた事例は僅か一六・二%を数えるに過ぎない。4の強度の交友関 友関係の多くは(七○・三%)は編成替え以前に全然交友関係を結んでいなかった生徒の間で新たに形成されており、 たに形成されたものは前者の場合より幾分多くなって四六・九%を示している。ところが、3のような弱い結合の交 半分以上が編成替え以前にもやはり1や2のような強い交友関係を結んでいた生徒同志によって形成されており、全 然交友関係をもっていなかった生徒の間で新たに形成されたのは全体からみると三二・五%にしかすぎない。 ような強い交友関係を形成していた生徒同志によって結ばれており、全然交友関係を結んでいなかった生徒の間に新 え直後に2の強度で結ばれている交友関係についてみると、その三分の一(三○・六%)が編成替え以前に1や2の 以前にどんな強さの交友関係を示していたかを調べてみる。編成替え直後に1の強度で結ばれている交友関係はその 以上のような関係を今度は逆の側面から眺め、編成替え直後にいろいろな強さで結ばれている交友関係は編成替え

哲

第3図 学級編成替え前後の交友関係の変化 (遊び)

[編成替え直後の] 交友関係の強度



 註
 …編成替え直後の各強度の変友関係に、な交友関係の何%が所属していつたか変友関係に、な変力関係の何%が所属していつたかを表す。

 …
 "

 2
 "

 3
 "

 …
 "

 4
 "

 編成替え直前に相互的な交友関係を結んでいなかつた者同志の中の何%がそれぞれ所属しているかを表す。

係 る。 友関係 状況の変化にも影 薄な交友関係 3や4のような稀 成替以前に全く交 に対し、1や2 めて受動的で 生徒同志によっ ようである。 形成したりする 関係を解消 に於てはそ このように、 四 に結ばれ % 0 までが 容易にそ な とし カ・ あ は て の っ 橛

る。またこの種の交友関係は、稀薄な交友関係のようにたやすく形成されたり、解消されたりするようなことは少ない。 ような強い結びつきの交友関係は比較的安定しており、少しばかりの状況の変化ではあまり影響を蒙らないようであ

関係の強度段階の各枠内に記された横線の棒の長さを比較することによって、編成替え以前に1の強さで結ばれてい 中に、それぞれ編成替え以前のどのような交友関係が多く含まれているかを容易に読みとることが出来る。 また、それぞれの枠内に於いて、各種の棒の長さを比較することにより、編成替え後にみられる各強度の交友関係の によって、編成替え以前に2の強さで結ばれていた交友関係が編成替え直後どう変化しているかを知る事が出来る。 た交友関係が編成替え直後にどう変化しているかを一目で理解でき、 第3図は第4表(a)が示してくれる結果を理解し易いように棒グラフが表わしたものである。この図では、交友 同様に各枠内の縦線の棒の長さを比較すること

うな傾向を示しているので、ここでは第4表 (b) を掲げるだけにとどめておく。 さて、次に「勉強」の基準についてであるが、これは「遊び」の基準や、次に述べる「親友」の基準と大体同じよ

二・五%である。 替え以前に3のような弱い交友関係を結んでいて、編成替え真後に1や2の強い交友関係に発展したのは ばれている交友関係の二九・○%が、編成替え後もそのまま1の強さの交友関係を形成している。これに対し、 強い交友関係は割合に編成替えの影響に対して耐久力があるように思われる。例えば、編成替え以前に1の強さで結 いので、編成替え直後の交友関係数の減少も他の基準に比して激しくみられる。然し、この基準に於ても1のような 親友の基準は前にも少しふれておいたように、その性格からして他の基準に較べ、編成替えの影響を敏感に受け易 また編成替えによって全然交友関係を失ってしまった事例は前者に於て全体の六一・三%、後者に 全 体 の

於て全体の七一・九%となっている。

第4表(b) 学級編成替え前後の交友関係の変化(勉強)

2年1 13 年学期	1	2	3	4	5	計
1	9(26.5)	3 [8.8]	2 [5.9]	1 [2.9]	19(55.9)	34 [100]
	(26.5)	(16.7)	(3.6)	(4.5)	(1.4)	(2.3)
2	3 [30]	1 (10)	1 [10]	0 (0)	5 (50)	10 (100)
	(8.8)	(5.6)	(1.8)	(0)	(0.4)	(0.7)
3	2 [4.8]	2 [4.8]	5(12.3)	1 [2.4]	31(75.7)	41 [100]
	(5.9)	(11.1)	(8.9)	(4.5)	(2.3)	(2.8)
4	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 [5.2] (4.5)	18(94.8) (1.3)	19 (100) (1.2)
5	20 (1.4)	12 (0.9)	48 [3.5]	19 [1.4]	1285(92.8)	1384 (100)
	(58.8)	(66.6)	(85.7)	(86.5)	(94.6)	(93.0)
計	34 [2.3]	18 [1.2]	56 [3.8]	22 [1.5]	1358[91.2]	1488 (100)
	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)	(100)

(例) は第4表 (a) の例にならう。

第4表(c) 学級編成替え前後の交友関係の変化 (親友)

				····	
1	2	3	4	5	計
9(29.0) (32.1)	0 (0)	3 [9.7] (8.8)	(0) (0)	19[61.3] (1.3)	31 (100) (2.1)
1 [6.6] (3.6)	0 (0) (0)	1 [6.6] (3.0)	1 [6.6] (10)	12(80.2) (0.9)	15 (100) (1.0)
			0 [0] (0)	23(71.9) (1.6)	32 (100) (2.2)
(0) (0)	0 (0) (0)	0 (0) (0)	0 (0) (0)	5(100.0) (0.4)	5 [100] (0.3)
		25 (1.8) (73.5)	9 (0.5) (90.0)	1351[96.2] (95.8)	1405 [100] (94.4)
28 [1.8] (100)	6 [0.4] (100)	34 (2.3) (100)	10 [0.7] (100)	1410(94.8) (100)	1488 [100] (100)
	9[29.0] (32.1) 1 [6.6] (3.6) 3 [9.4] (10.7) 0 [0] (0) 15 [1.0] (53.6) 28 [1.8]	9[29.0] 0 [0] (32.1) 0 [0] 1 [6.6] 0 [0] (3.6) (0) 3 [9.4] 1 [3.1] (10.7) (16.7) 0 [0] 0 [0] (0) (0) 15 [1.0] 5 [0.4] (53.6) (83.3) 28 [1.8] 6 [0.4]	$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$

(例) は第4表 (a) の例にならう。

体の僅か一六・三%にしかすぎない(第4表(c)を参照)。このような結果から「親友」の基準で結ばれる交友関係 生徒の間に形成された新しい交友関係であった。そして編成替え以前に1や2の強い交友関係を結んでいたものは全 結合をしている交友関係は、その三分の二以上(七三・五%)が編成替え以前に何の交友関係をも結んでいなかった %が全然交友関係を結んでいなかったもの同志の交友関係であった。これに比して、編成替え直後に3のような弱 は他の基準のそれに比して編成替えの影響を受け易いが、それでもなお1のような強い結びつきの交友関係はその影 の一以上(三五・七%)が編成替え以前に既に1や2のような強い結びつきをもっていた交友関係であり、 この傾向を逆の側面から眺めてみると、編成替え直後に1の強い結びつきで形成されている交友関係は、その三分 五三・六

響の受け方が比較的弱いという事実がうかがわれる。

関係の変化の様態をその強度との関連において分析してみた。 場合より遙かに少く、 に、 方にならって、 での間に、 事にする(但し、 合は強度4を除いた各強度の交友関係ともすべてその交友関係を解消してしまう割合は、学級編成替えを挾んだ時の カ月を経る間に交友関係がどのように変化していったかを、前項と同じくその結合強度に焦点を合せて分析してみる 5 弱い交友関係ほどその関係を解消し易い、という一般的傾向がみとめられる(詳細な記述は省略)。然し今度の場 学級編成替え以後の交友関係の変化と交友関係の強度との関係 各強度の交友関係がそれぞれどのように変化したかは第5表に示された通りである。 「遊び」の基準から眺めてゆくと、 この項は前項と異り、A組とH組の二組の結果である)。編成替え直後から第三回の調査に至るま 逆に1、 2のような強い交友関係に留る率は後者の場合より多くなっている。 概して前項の場合と同じように強い交友関係ほど崩れにくく、 この項では、学級編成替え直後の第二回の調査から九 前項では、学級編成替え前後に於ける交友 この表を第4表の見 特にこの傾向は 逆

2 ² #3**				2 ·	3) }	1	1.		5	Tot	al
	8	(57.1)	2	(14,3)	2	[14,3]	0	(0)	2	(14,3)	14	[100]
!	(19.1)		(9,1)		(1.4)		(0)	_	(0.1)	_	(0.7)	_
	4	4	2	0		2	Ø	0	2	0	8	<u>(6)</u>
	3	(21.4)	2	[14,3]	4(例)	(286)	ł	(7.1)	4	(28.6)	14	(00)
2	(7.1)		(9.1)		(2,8)		(8.3)		(0.2)		(0.7)	_
		2	[2]	0	2	2		0	3	0		<u> </u>
	9	(10,1)	10	(11.2)	37	(415)	1	(1.1)	33	[176]	89	(101)
3	(21,4)	•	(45,4)		(255)		(8,3)		(1.9)		(43)	
	5	4	[6]	@	[[6]	2	0	0	Ш	Ø	38	
	ı	(16.7)	0	[0]	0	[0]	0	(0)	5	(83,3)	6	(10O)
4	(2.4)	•	(0)		(0)		(0)		(0.3)		(0.3)	
		0	0	0	0	0	0	0		4 ·	2	(4)
	21	(1.1)	8	(0.4)	102	(5.5)	10	(0,5)	1805	(925)	1948	(100)
5	(50,0)		(36,4)		(70.3)		(83,4)		(97.5)		(94)	اھا
	6	(5)	[3]	⑤	25	Ø	5	<u> </u>	24	(592)	253	(695)
	42	(2.1)	22	(1,1)	145	(7)	12	(0.5)	1850	(89.3)	2071	(00)
Total	(100)	·	(108)		(100)		(100)		(100)		(100)	(an)
1000	[7]	25	[3]	9	43	(02)	<u>6</u>	<u> </u>	[23]	(619)	310	(76)

学級編成替え以後の交友関係の変化(遊び)

第二行第三列の4という数字は学級編成替え直後に2の強度の交友 関係を示していたが、それから 9 ケ月を経た第 3 回の調査には3 の強度の友交関係に薄らいでしまつた交友関係の頻数を表す。その 傍の [28.6] という数字は編成替え直後に2の強度で結ばれていた 交友関係の中、第3回の調査で3の強度の交友関係に変つてしまつ たものの%を表わし、(2.8)という数字は第3回の調査に3の強度 で結ばれている交友関係の中、編成替え直後に2の強度の交友関係 を示していたものの%を表わしている。 ②という数字は4事例の中 2事例は前学年で同級に所属していたもの同志の交友関係を示し, その傍の②という数字は4事例の中2事例は前学年で異つた学級に いた者同志によつて結ばれた交友関係を示す。

ばれていた交友関係が、その

後第三回の調査までの間にど

う変化して行ったかを知るこ

の縦線の棒の長さを比較する

とができるし、

同様に各枠内

編成替え直後に1の強さで結

さを比較することによって、

枠内に記された横線の棒の長

に2の強さで結ばれて ことによって、 れぞれの枠内に於いて、各種 を知ることができる。またそ までにどう変化して行っ 友関係がその後第三回の 編成替え直後 いた交

第5表

九四

は、

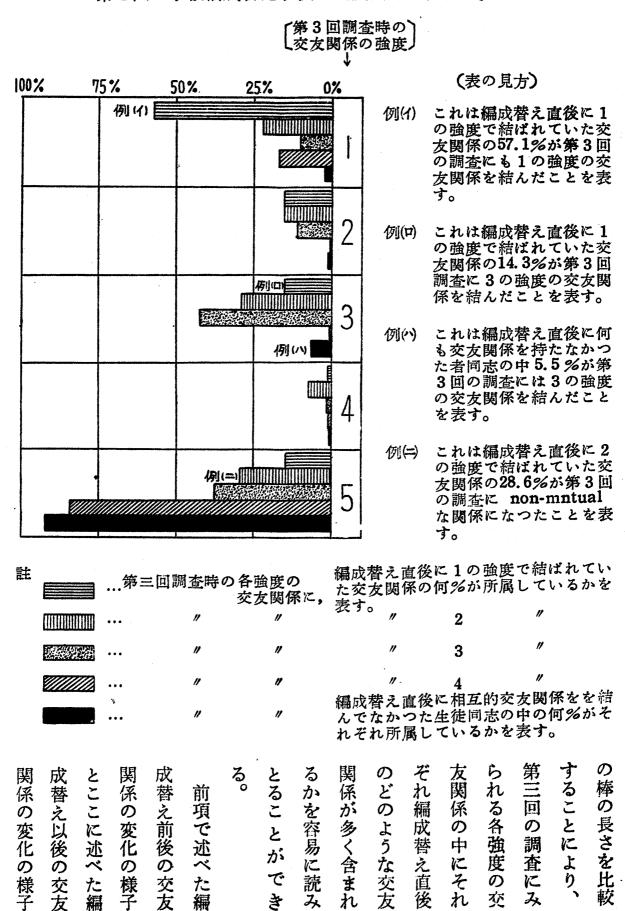
交友関係の強度段階の各

したものである。

の

図 で

第4図 学級編成替え以後の交友関係の変化(遊び)



で

た編

より、

査

に

0

32

九 Ŧī.

の

様子

た編

弱い交友関係しか結んでいなかった生徒の間に可成り多くの強い交友関係が結ばれるようになっていた。 向は前学年に他学級にいた生徒同志の間に著るしくみられた(第5表の○内の数字を参照)。 を比較することによって、単なる時間的経過と違って学級編成替えが生徒の間に結ばれる交友関係の変化にいかに強 い影響を与えているかがうかがえる。一方また第三回の調査までには、 編成替え直後に全く交友関係のなかっ 特にこの傾 た或

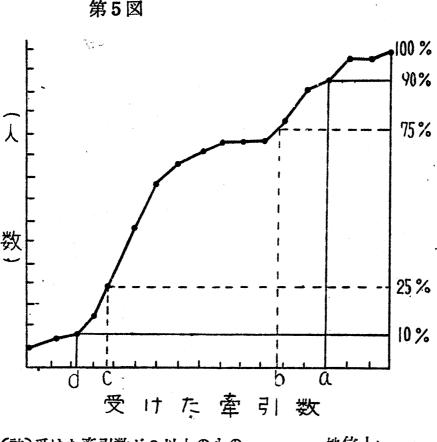
僅 期間の間に漸次消滅していってしまう。 ある。この事実を逆の側面からみるならば、 確立し、 のよりはいくらか面識があっ に同じ学級にいた生徒同志が交友関係を結び、異った学級に属していた生徒同志の交友関係はその人数の割に比して かしか結ばれない。 これらの結果が示すように、学級編成替えによって新学級が編成されると、その当初においては、主として前学年 強い交友関係が結ばれるようになってくる。このように時間は交友関係の形成にとって極めて重要な要因で ところがある一定の期間を経過すると、 たという単純な理由により、新しく結ばれた同学級生徒同志の暫定的な交友関係は一定 新学級が編成された当初、たまたま前学年に同じ学級にいて他学級のも 以前に異った学級にいた生徒同志の間にも相互認識が

この学級構造の変化過程の分析についで、次の項からは、学級内の生徒個人に焦点を合せ、学級編成替えによって各 こでは大略「遊び」の基準と同じような傾向がみとめられそうだということを指摘するだけに止めておく。 頻数そのものが少なく、この少い頻数をもとに詳細な分析を行うことは、 生徒の地位がいかなる変化を蒙るか、またその変化の仕方と各生徒の相互作用の型との間にどのような関係がみとめ さて、以上5つの項を設け、学級編成替えの交友関係に及ぼす影響に関するいくつかの事実を明らかにしてきた。 次に「親友」の基準についての分析であるが、この基準は、A組とH組の二組の集計だけでは各カテゴリーに入る 却って誤見を招く恐れがある。 て、こ

られるかを分析してゆくことにする。

学級編成替えの生徒の地位(status)に及ぼす影響

の後十一ヵ月を経た時期(第三回の調査) 生徒の地位に及ぼす学級編成替えの影響は、 にそれぞれ実施された三回の調査を通じて、各生徒の地位がどのような変 編成替え直前 (第一回調査)、 編成替え直後(第二回調査)、編成替え



b C との間のも との間のもの……地位Ⅳ 受けた牽引数がCとd 1 領

られる調査結果は前後三回にわたって調査を 試みたA組とH組の二組についての結果であ とによって知ることができよう。以下に述べ 化の過程をたどってゆくかを明らかにするこ

その結果、九〇パーセンタイル以上に留る人、 人の地位を地位I (status I) とし、以下第 即ち第5図の例ではa以上の牽引数を受けた 積し、それをパーセンタイルによって表わす。 数を目盛り、受けた牽引数について人数を累 いたように、横軸に受けた牽引数、 のような方法で規定した。第5図に示してお 地位の規定 先す各生徒の地位を次 縦軸に人

九七

学級編成替えの交友関係並に地位に及ぼす影響

5図の註に示 しておいた如く、 順次に地位■、地位■、地位Ⅳ、地位Ⅴを規定する。そして地位Ⅰと地位Ⅱをスター

地位

▼と地位

▼を低位者領域と一応名付けることにする。

うかがえる。先ずこの変動を概括的に眺めると、三回の調査を通じ、全然地位の変動を示さなかった生徒は一○二人 値を表わしているのは一応次のような理由によるのではないかと考えられる。 四・九%)、編成替え以後の変動を経験した生徒は五一人(五〇・〇%)で、 中僅か二八人(二七・四%)で、残りの七四人(七二・六%)はなんらかのかたちで地位の変動を経験している。更 替え後二ヵ月位いの期間ではまだ新学級の生徒達の間に十分な相互認識が成立していないので、この当時に占める地 の変動をみてみると、 戻ってゆく傾向が強いように思われる。例えば、編成替えの影響を受けて、それ以前に占めていた地位よりも低い地 されると、 のように、編成替え以後の変動を経験している生徒の数が、編成替え前後の変動を経験している生徒の数にほぼ近い にこの変動の様子を学級編成替え前後の変動 位は半数以上の生徒違にとって暫定的な地位に過ぎない。 て、各人の地位も修正を加えられ、第三回の調査の頃迄には、 一回調査と第三回調査の間の変動)とに分けてみてみると、編後替え前後の変動を経験した生徒は五六人(全体の五 「遊び」の基準における地位の変動 その影響を受けて生徒達の今迄の地位は変動を起し、それぞれ新しい地位を占めるようになる。然し編成 而もこの相互認知の成立に伴う生徒の地位の変動傾向をよくみると編成替え以前に占めていた地位に再び 彼等の地位は、学級編成替えを挟んで、或は編成替え以後において様々に変動していることが (第一回調査と第二回調査の間の変動) 前項で説明した地位の規定に従い、「遊び」の基準における生徒の地位 従っ 編成替えが行われた当時の地位とは違った地位に変動 て その後十分な相互認知が漸時成立してくるにつれ 両者の間には殆ど差がみられない。 即ち、 と学級編成替え以後の変動 編成替えによって新学級が編成 第

ていた地位よりも高い地位に上った生徒は二四人みられるが、その中の一三人(五四・二%)はまたその地位を変動 動させており、 位に下ってしまった生徒は三二人を数えるが、その中の二〇人(六二・五%)は編成替え以後にもまたその地位を変 質的な学級へ替った場合であるが)各生徒の占める地位は以前に占めていた地位と較べてそれほど激しい変り方を示 地位を降下させ、これも亦大体編成替え以前に占めていた地位に復帰している。要するにこの結果は、十分な相互認 させており、 位を上昇させ、 知が成立している状況のもとでは、たとえ学級が替ったとしても(勿論、グループスタンダードの似通った比較的同 而もこの一三人の生徒の中一二人(九二・三%、地位を上げた二四人中の五〇・〇%)までが再びその 大体編成替え以前に占めていた地位に復帰している。 而もこの二○人の生徒の中一四人(七○・○%、地位を下げた三二人中の四三・八%)は再びその地 一方編成替えの影響によって、それ以前に占め

さないという事実を明らかにしてくれる。 生徒の一七・六%)についてみると、編成替え直後に既に高い地位を占めているものが他に比して遙かに多くみられ た生徒の地位の変動についてもう少したちいった分析を加えてみることにする。第6表は編成替え前後の地位の変動 の様子をそれぞれの地位について詳しく表わしたものである。先ず、編成替え以前に地位上にあった生徒一八人(全 **ーを占めていた生徒であり、** る。 者の領域に落ちているが、 (四○・○%)までがやはり編成替え直前に地位Ⅰを占めていた生徒である。 以上にお 即ち、 いて、 編成替え直後に地位上につくことのできた生徒一一人の中七人(六三・六%)までが編成替え直前に地位 生徒の地位の変動様態に関する概括的な記述を試みてみたが、次に各地位毎にその地位を占めてい この中一人は二年に進級した当初からずっと長期欠席をしていた生徒である。 また編成替え直後にスター領域(地位┃と地位┃) に属した三○人の生徒の 中 一方、 この生徒達の中から二人が低位 尚他の一人

編成替え前後の地位の変動 第6表

			編成替え直後(2年1学期)の地位					
			スター	- 領域		低位者領域		計
			Į.	I	Ш	IV	V	·
編成数	ス タ 1	I	7	5	4	2	0	18
育え直前	領域	I	2	4	(例) 9	0	4	19
編成替え直前(1年3学期)の		П	2	9	29	6	1	47
学期(低位者領域	IV	O	0	4	4	1	9
地位	4領域	V	0	1	3	3	2	9
	計		11	19	49	15 8		102

1学期に地位2に下降した者の人数を表わす。

幾分多くみられる。そして地位Ⅰを占めていた生

成替え以前地位Iを占めていた生徒の場合よりも

その地位に変動を生じている生徒の数は、編

編成替え直後に地位』、

或は地位■を占めている

生徒の一八・六%)についてみると、その多くは

編成替え以前地位〓を占めていた生徒一九人(全

は第三回の調査で再び地位■に上ってきている。

直後も依然としてスター領域に留っているのに対

この地位 ▮のものは 一九人中の六人

<u>=</u>

徒は一八人の中一二人(六六・七%)が編成替え

(例) 帰 の 四人の生徒の中三人は第三回の調査で地位量に ってきている。 次に編成替え以前地位量に位置

人が最低の地位Vに落ちてしまっている。然しこ

・六%)しかスター領域に留っていない。

また四

後に地位Iのような高い地位に位いするようなものはその後もなかなかその地位を変動させていない。 占めている。 していた生徒 この中、 (四七人) 地位Ⅰを占めた二人は第三回の調査でもひきつづき地位Ⅰを保っている。つまり、 で編成替え直後スター領域に入ってきたものは一一人おり、二人が地位Ⅰ、 九人が地位

を これに対し、 編成替え直

編成替え以後の地位の変動(遊び) 第7表

領域に留っている。 最後に、 編成替え以前に地位Ⅳ及び地位Ⅴを占めていた生徒についてみると、編成替え直後にス 8 2 华 ク ー領域に入るものは殆どなく、

領域に落ちた生徒が七人みられるが、その中で再び地位■にまいもどったのは二人で、残りの五人がそのまま低位者

地位▮を占めた九人の生徒の中七人までが再び元の地位▮に落ちてしまっている。

これとは逆に、

地位

から低位者

第3回調査時(2年3学期)の地位 低位者領域 計 スター領域 I N V I 編 ス 9 0 2 0 0 11 I 夙 成替え直後(2年1学期)の 1 領域 19 3 5 11 0 0 I (例) **7** 1 49 29 10 M 2 低位者 15 5 5 4 N 0 1 領域 地位 3 1 V 0 0 4 13 51 16 8 102 計 14

第三行第二列の数字7は2年1学期に地位 🏽 を占め、 (例) 3学期に地位 [に上昇した者の人数。

る。

保ち、

他の二人は再び低位者領域へ墜落して

■に落ちている。また地位■に上ったもの

は七

人いるが、その中の五人はひきつづきその地位を

すぎない。而もこの一人も第三回の調査では地位

一人を数えるに

が が激しく、その半分以上へ一一人…五七・ 占めた生徒の地位は比較的安定しており、 後の変動をみてみると、 変動して地位■に落ちていただけである。 タ の調査では、 地位■に落ちている。而も地位■に落ちたこの ー領域でも、 次に第7表によって、 一一人中僅か二人(一八・二%)が 地位Ⅱを占める生徒の地位は変動 各地位の学級編成替え以 編成替え直後に地位Ⅰを 同じス 九%) 第三回

Ŋ れなかった。 徒であった。 に低位者領域以外の地位を占めていた生徒であった。 地位■を占める生徒の中で低位者領域に墜落するものは一人も見当らなかった。 一一人の生徒の中八人までが編成替え直後にスター領域以外の地位から地位』に上ってきた生徒であった。 地位V(低位者領域)を占めている生徒の中で、第三回の調査においてスター領域に上昇したのは一人しか見ら 而も、この一人は編成替え直後になんらかの拍子で地位Ⅰから地位Ⅳへ墜落してきた特殊な例を示す生 その他、 低位者の領域から地位■に上昇している生徒が九人みられるが、その中の七人は編成替え以前 これとは逆に、編成替え直後に地位 またこの

的 高 ものである。 影響を受けて様々に変動する。然し、編成替え直後に占める地位は半数以上の生徒にとってはあくまでも暫定的な地 ものは全くなく、 大まかな分類は既になされている。編成替え直後スター領域に位置しているもので、それ以後低位者領域に墜落する 動によって、再び以前の低い地位に没落し、逆に、以前の高い地位から低い地位に落ちていた生徒の多くは再び元の 相互認知が熟してくるにつれてそれは更に変動を続けると述べた。然し、編成替え直後であっても、各生徒の地位の 定して評価されており、さほど激しい変動を示さないといえよう。先に、編成替え直後の地位は暫定的なものであり、 位であって、 以上この項で述べてきた諸結果を整理すると次のような事実がうかがえる。即ち、各生徒の地位は学級編成替えの 事例を除いては他に見当らない。また地位【を占めるような顕著なリーダーは、 地位に上昇していくようである。結局、十分な相互認知が成立している状況のもとでは、 編成替えの影響を受け本来の低い地位を高い地位にのしあげていた生徒の多くはこの編成替え以後の変 それは生徒の間に相互認識が成立するにつれ、漸次修正されて比較的安定した地位えと変えられてゆく 方編成替え直後低位者領域に位置しているもので、それ以後スター領域に入ってくるものは例外 学級編成替えがなされたばかり 各人の地位は比較的安

を保持している。この結果は未知の人々の集りにも社会力学的法則(the sociodynamic law)が適用され、誰より(紹) の時期でも逸早くその能力を認められ、且つ信望を得て安定した高い地位につき、その後もひきつづきその高 い地位

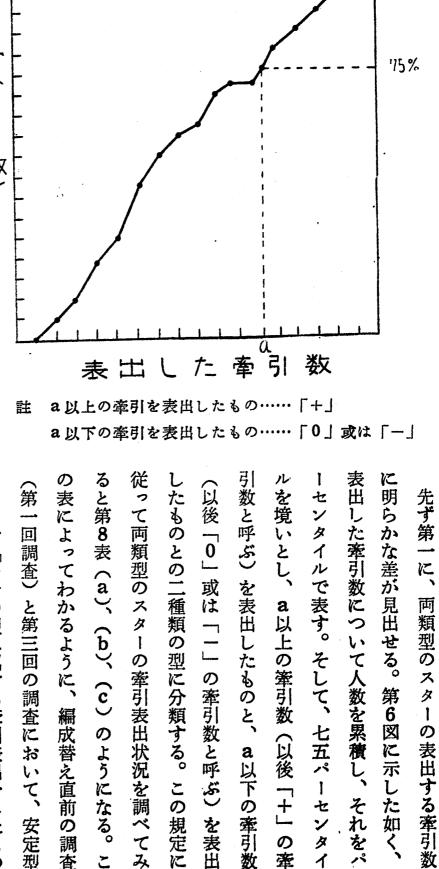
も早くスターに選択の矢が集中することを実証したバーカーの研究結果とよく似ている。(1)

取り交されていないので、地位の区分がうまくゆかない。2 高校の一、二年生では、「遊び」、「勉強」、「親友」の 域の生徒に於いて著るしい。 可成りの類似性を示しているので、他の基準を改めて分析する必要がないように思える。特にその類似度はスター 各基準における選択が未だ十分に分化していないので、「遊び」の基準でみられる各成員の地位は他の基準のそれと この分析は省略する。 さて次に、「勉強」及び「親友」の基準についても同様の分析を試みるべきであるが、次のような理由によって、 1 これらの基準は「遊び」の基準において行ったと同様の分析を加えるだけの十分な選択が 領

その地位を喪失し、二度と再びスター領域に上ってこなかったもの……不安定型スターB型。 あがってくるもの……不安定型スターA型、3 成替えの影響を受けて一度スター領域から脱落し、十分な相互認知が成立してくるにつれて、再びスター領域にのし 回の調査にわたって地位Ⅰを占めるもの……安定型スター、② 類型があることがみとめられた。それは大略、次の三つの類型にまとめられる。 3 スターの二類型 生徒の地位の変動に関する分析の過程において、スターの地位の変動の仕方にいくつかの 編成替え以前にはスター領域にいながら、編成替えの影響を受けて 編成替え以前にはスター領域に位置していたが、編 (1) 常にスター 領域に留り、 而も二

響を比較的受け易い不安定型スターとの間にはどのような質的差異がみとめられるであろうか。 このように異った変動の類型を示すスター、換言すれば、編成替えの影響をあまり受けない安定型スターとその影

学級編成替えの変友関係並に地位に及ぼす影響



出する傾向がみられる。この結果から次のようなことが推察される。即ち、不安定型のスターは自分から他の多くの 替え直後の調査 は一人も見当らないが、不安定型のスターはその半分以上が「+」の型に属する牽引表出をしている。ところが編成 十分相互認知が行われている状況のもとでは、不安定型スターは安定型スターと異って自分自からも多くの牽引を表 (第二回調査) では、 人 数 両類型のスターの表出する牽引数の間に全く差異がみられなかった。つまり、 従って両類型のスターの牽引表出状況を調べてみ 引数と呼ぶ)を表出したものと、a以下の牽引数 ると第8表(a)、(b)、(c)のようになる。こ ーセンタイルで表す。そして、七五パーセンタイ 表出した牽引数について人数を累積し、それをパ の表によってわかるように、編成替え直前の調査 したものとの二種類の型に分類する。この規定に ルを境いとし、a以上の牽引数(以後「+」の牽 スターで「十」の型に属する牽引表出をしたもの (以後「0」或は「一」の牽引数と呼ぶ) を表出 (第一回調査)と第三回の調査において、安定型

第6図

択される理由にもその差がうかがえる。先ず五人の心理学専攻学徒並に現職の高校教員に依頼して、

の質的差異は彼等の牽引表出状況にみとめられるが、

更にまた彼等が他の成員から選

生徒達が自由に

ができるので、彼等の表出する牽引数は寧ろ平均以下である。編成替え直後に既にスターとして安定した地位につい

おのずと備っている人望によって高い地位を占めること

安定型のスターは所謂堅実型スタ

で、自分から進んで学級内の他の生徒に働きかけなくとも、

の間に十分な相互認知が成立するに足るだけの日時を必要とする。これに反し、

しい状況に直面すると、たちまちその地位を衷失してしまい、

再び以前の高

い地位を得るためには、

新学級の生徒達

新学級が編成されたというような新

生徒に積極的にはたらきかけることによって自己の地位を高めている。従って、

ているのはこの種の

スター

である。

以上のように両類型のスター

第8表(a) スターの牽引選択の型 編成替え直前 (第1回調査)

構成否え追則	I CAP I	凹两金	<i>)</i>
牽引選択 の類型 スター の類型	[+]	[-]	計
安 定 型	0	8	8
不安定型	9	7	16
計	9	15	(人) 24

P<0.05

第表8(b) スターの牽引選択の型 編成替え直後(第2回調査)

牽引選択 の類型 スター の類型	[-+]	[-]	計	
安 定 型	3	5	8	
不安定型	6	10	16	
計	9	15	(人) 24	
7 × 0 0F				

P > 0.05

第8表(c) スターの牽引選択の型 第3回調査

No o test tour rate					
牽引選択 の類型 スター の類型	[+]	[-]	計		
安定型	0	8	8		
不安定型	7	7	14		
計	7	15	(人) 22		
P < 0.05 註 2 名欠席					

三〇五

型のスターをそれぞれ一括して、彼等が選ばれた選択理由を調べてみると第9表のよのになる。この表をみればわか 特長とそれ程でもない特長とに分類してもらった。その結果、五人のすべてが堅実型スターの備えている特長である あげた二十七種の選択理由を所謂る模範高校生即ち、堅実なスターならば通常誰でもが必ず備えていなければならぬ 由とした。A群の理由には「成績優秀」、「知性的」、「思慮深い」、「信頼がおける」などに類した理由がみられ、 と一致して判断した選択理由を一つにまとめてA群の理由とし、それ以外の選択理由もまた一つにまとめてB群の理 の理由には「社交的」、「気だてがよい」、「明朗」、「気が合う」などに類した理由がみられる。この分類に従い、 B 群 両類

第9表 スターの選択理由				
本引選択 の理由 スター の類型	A群	B群	計	
安定型	58	73	131	
不安定型	20	105	125	
計	78	178	256	
P / 0 01				

ታነ

るように、 理由でも、 はA群の理由もB群の理由も兼ね備えた形で選ばれている(但し、 であって、A群の理由があげられる例は少ない。これに対し、安定型のスター 「明朗」とかいう理由は僅かしかみられなかった)。 不安定型スターが他の成員から牽引を受ける主な理由はB群の理由 不安定型スターの選択理由として多くみられるような「社交的」と 同じB群 の

以上の如き資料の分析から、一概にスターといっても安定型のスター と不安

と選択を受ける理由においてはっきりした差異を表じていることがうかがわれ

定型のスターの二種類のスターが考えられ、

而もこの両者はその牽引表出状況

た。

る。 選択過程の面に現われる個人の パーソナリティ ーや集団に対する彼の位置関係等の解明に重点を置 く研究方向 であ 展過程の記述と分析に重点を置く研究方向であり、他の一つは集団それ自体よりも寧ろ集団内の個人に焦点を合せ、 ソシオメト Æ 本研究はこの両研究方向をともに考慮し乍ら、学級編成替えの交友関係並に生徒の地位に及ぼす影響をソシオメ V ジェニングス及びその協力者達が、 リー には大略二つの研究方向が考えられる。その一つは集団それ自体に焦点を合せ、集団の構造やその発 人間関係現象の測定と分析に有効な方法として発展させてきた狭義の

第一回調査は一年三学期末、 年から二年へ進級する際に学級編成替えが行われた。 本研究は、某高等学校生徒を一年三学期から二年三学期までの一年間、前後三回にわたって調査したものである。 第二回調査は二年一学期中頃、 第三回調査は二年三学期末にそれぞれ実施された。尚、

ŀ

リッ

ク・テストによって明らかにしようと試みたものである。

び」、「勉強」、「親友」の三場面を選んだ。選択は無制限で行わせ、選択の強度は、 の選択と自分が誰から選ばれるかの予想質問への回答とを加味して表わすことにした。 ソシオメトリッ ŋ ・テストの選択基準には、 高校生の営む学校生活に於て最も重要な意義をもつと思われる「遊 単なる選択に「特に好き(嫌い)」

以上の如き計画に基いて実施されたこの調査から次のような結果が得られた。

学級編成替えの交友関係に及ぼす影響 1 どの基準でも同じように、学級編成替え後の新学級に於ては反

学級編成替えの交友関係並に地位に及ぼす影響

撥関係よりも友好関係の方が早期に形成された。(2) らかの相互的交友関係を結んでいた生徒が、編成替えによって異った学級に離れ離れに編入された場合、 幾分薄らぎ、前学年に他学級であった生徒同志の間にも相互的交友関係が比較的多く結ばれるようになった。しかし、 著にみられた。 友関係を結ぶ傾向がみられた。この傾向は強い相互的交友関係の場合程著しく現れた。また「親友」の基準に於て顕 程著るしかった。(5) のときよりも寧ろ多くの相互的交友関係が結ばれていた。而もこの増加傾向は強い結びつきの相互的交友関係の場合 的交友関係の中で占める割合は非常に少なくなった。これらの傾向は「親友」の基準に於て著るしく現われた。 り、どの基準でも友好関係が広範囲に、数多く形成された。逆に反撥関係は少なくなった。(3) 交友関係を除いては殆んどがその関係を解消してしまった。 生徒が新学級にともに編入された場合、旧学級で結んでいた関係が強ければ強い程、その関係は新学級でも数多く保 に「親友」の基準は編成替えの影響に敏感であり、このような傾向は顕著に現れていた。(8) 二回調査)には相互的交友関係(mutual relation)の頻数は減少し、而も強い結びつきの相互的交友関係が全相互 「親友」の基準ではこの傾向は一向に薄らいでこなかった。(7) 旧学級でなんらかの相互的交友関係を結んでいた どの基準とも編成替え以後は再び相互的交友関係が増加し、第三回調査の頃には編成替え直前 逆にその関係が弱ければ弱い程、編成替えの影響を強く受けて多くがその関係を解消してしまっていた。 6 第三回調査のときにはよほどの強い関係でない限り、その殆んどが消滅してしまっていた。しかし、 「遊び」の基準に於いては、新学級の生徒の間に相互認知が成立してくるにつれてこの傾向は 編成替え当初は、前学年でも同じ学級であった生徒同志が他に比して比較的容易に相互的交 学年の変り目に学級編成替えを行うと、 また、 この強い関係でさえも期間が経つにつれて序々に 旧学級においてなん 編成替え直後 生徒の面識が広ま (第一回調査) 強い

なものであった。 友」の両基準ともに、学級編成替えというような激しい状況の変化が挿入されなくとも、単なる時間の経過につれて 交友関係は変化していった。然しこの場合に生ずる変化の程度は編成替えを間に挾んばときの変化よりも遙かに緩慢 いて変化し難く、 「親友」の基準に於いて結ばれていた強い相互的交友関係はいつまでもその関係を保っていた。(9) 弱い相互的交友関係程不安定で変化し易いという傾向がみとめられた。 10 時間の経過にともなって交友関係が変化する場合でも、 また強い相互的交友関係程安定して 「遊び」、

その後十分な相互認知が成立してくるにつれて、その地位は漸次安定した地位へと修正されていった。(4) 而もこ 編成替えを経て新学級が編成された当初に、生徒達が占める地位は半数以上の生徒達にとって暫定的なものであり、 は低位者領域からスター領域へ昇ってゆくという極端な変動を示す生徒は殆んどみられなかった。(6) 初でも既に地位の大まかな分類はなされており、 の修正によって、大体が編成替え直前に旧学級で占めていたと同じ地位に戻っていった。(5) しかし、編成替え当 生徒は極く少数しかみられなかった。(9) われたときスター領域から低位者領域へ、あるいは逆に低位者領域からスター領域へと激しく地位を変動させている た地位に就き、 最高の地位を占めるような生徒達及び最低の地位を占めるような生徒達は、編成替え後他の生徒よりも逸早く固定し 由本文参照)。(2) った生徒よりも中程の地位にあった生徒の方が編成替えによってその地位を変動させ易かった。(8) 一、学級編成替えの生徒に及ぼす影響 その後も引き続きその地位に留る傾向がうかがわれた。(7) 三回の調査を通じ、 約三分の二の生徒がなんらかのかたちで地位の変動を経験していた。 (1) 地位の変動に関する分析は、「遊び」の基準に就いてのみ行っ スターの中にいつでも高い地位に留ることのできる安定型スターと、 その後にスター領域から低位者領域へ墜落してしまったり、 旧学級内で高い地位及び低い地位にあ 編成替えが行 新学級内で あるい た (理 3 ち

っとした状況の変化でその地位を変動させ易い不安定型スターの二種類が区別できた。(10) 両種のスターは、 そ

の相互作用の型及び他の生徒から選ばれる被選択理由に差異がみられた。

特にスター、低位者、多数の拒否を受けた者のパーソナリティーの特性に関する問題、2 この研究を補足する意味で、更に、1 ソシオメトリー上の各地位とそれを占める生徒のパーソナリティーとの関係、 以上が学級編成替えの交友関係並に生徒の地位に及ぼす影響を明らかにしようと試みた本研究の概要である。尚、 安定型と不安定型の二種

試みられたが、紙数の関係上、その結果についての記述は次の機会にゆずり、ここではこのような二つの問題が補足 類のスターとその学級活動に於ける役割行動 (role-playing) の差異に関する問題の二問題が取上げられて、

調査として究明されたといふことを記すだけにとどめておく。

世話を頂いた東京都立第一商業高等学校の武市春男校長、並に田原七之助先生に感謝の意を捧げたいと存じます。ま たこの研究に就いていろいろと御指導御鞭撻を賜つた横山松三郎先生に心から御礼申上げます。 本研究は関本昌秀の大学卒業論文(昭和二十七年度)としてなされたものである。御多忙中、御面倒な被験者のお(w)

註 frame of reference) を扱いうる。四、実施をするのに金がかからない。五、アクション・リサーチ (action research) 持っている。 三、被験者が自分をとりまく環境をどのように認知しているかを知りうる。即ち主観的な関係枠(subjective 味える。従って興味をもちうる。七、社学心理学者が便宜的に使っている概念を比較的つかみ得る指標になりうる。 のをつかみ出しうる。二、社会現象を取扱っている種々の領域の者が互いに協力して研究を進めうるような多面的なものを 役立ちうる。六、他のテストと比較して自分自身の希望がかなえられそうだといふようなテストに対する多少の参加感が 何散ソシオメトリーが社会心理学者、社会学者等に注目されるに至ったかについてリンドセイ Lindzey, G. は次のような原因をあげている。一、人間関係を概念的にも実証的にも見出しうる程〃社会的〃なも とボルガッ

註 ンドゼ 社会的鋭敏性、 イとボ N 社会的地位 ガ ソシオメトリーの有効性を強調している。(9)(会的地位、志気、集団構造等の諸概念はソ ٠, 的地位、志気、集団構造をは社会科学者が現在、 頻繁に用いてい る実証的諸概念の中、 **%** オメトリーを適用することにより一層明瞭に定義し得る 指導性、 少数民族の偏見、 社会的適

ようになっ たと述べ、

註

前生に45 : 横え)の交友関係並に地位に及ぼす影響の測定」を参照のことで替え)の交友関係並に地位に及ぼす影響の測定」を参照のことである。(37) な面か る研 村共同体を対象し 働回転率 ェル が試みたプル ソ **%** ら眺めようとしたクリッスウェルの研究、 -(5)(6) オ ガ メト 1 更に海軍航空部隊の心理的な集団構造と志気との関係を明らかに ዾ ・とディ の関係に関する研究。(公) y ٠, 1) た研究(25) *ク* リ クソンによる人間関係とモラールとの関係に を集団特性に関する指標として用いる研究は古くからさまざまな分野に於て数多く試みられてきた。 ソ小学校や、 リッスウェルの所を、ニューとリーショルの研究、人種的偏見をソシオメトリックで、食堂従業員の人間関係現象にメスを入れたワイトの研究、人種的偏見をソシオメトリックで、食堂従業員の人間関係現象にメスを入れたワイトの研究、人種的偏見をソシオメトリックである人間関係とモラールとの関係に関する研究やメイヨーとロンバートの人間関係と欠勤及び労みる人間関係とモラールとの関係に関する研究やメイヨーとロンバートの人間関係と欠勤及び労みる人間関係とモラールとの関係に関する研究やメイヨーとロンバートの人間関係と欠勤及び労なる人間関係とモラールとの関係に関する研究やメイヨーとロンバートの人間関係と欠勤及び労力を対している。 ニューカムによって試みられた態度の変化に及ぼす人間関係の影響に いては関本昌秀の大学卒業論文「学級変動 し たシェンキソスの研究などはこの種の研究 (学級 ŧ 方向

四 る。 倸 ぁ n の 動因の側面の研究、 自体 の型 研究例も前者に比して遙かに少い。斯様に、この方向の研究を遅滞させている大きな原因は、 たりばったりにパ 前註に述べたような方向の研究がここ二十年来種々の分野で著しく発展を送げてきたのに反し、 の か pattern 研究 在の の オ メト 遅滞に帰せられるのではないだろうか。 of interpersonal relation 1 換言すれば、 y 1 1 ソナ ソ ナ に於ける動因の側面 リアイ リティ ソシオメトリックな諸変数(地位 status、 1 1 の属性とソシオメトリックな変数とを関連させている研究が余りにも多 研究の発展段階からしては、 「の研究はパーソナリティ き とパーソナリティー変数との関係に関する研究は比較的発展が遅れ、 予め明確にパー この程 をい 度の研究が精 ソ かに摑んでいるかに ナリティーの概念分析をることなしに、 相互作用の型 interaction pattern 一杯なの よっ かも知れ やはりパーソナリティ ソシオメトリーに於ける ない。 更に ٧١ **く** ょ . う ただゆき か K 人間 の 思え 1 そ 究

註

方向に

きる。

先ず、

ソ

オ

メトリ

ŋ

テ

ストを

か

けたと同じ被験者に自分の或は

他人の

1

ナ リテ 0 バ

1

を

直接評

る

研究

か

みられ

る。

この評価法は

古く

か

ら採用

されて

きた。

或る大学の女子寮の学生に、

六 ソ

つ

1

ソ

ナ

リテ

この点はリーマン達もその研究結果から認めている。この欠陥を補うためにソシオメトリック・テストの被験者とは違った(B) 1 タヴュー 人に評価を頼依する方法を始めとし、 Ħ 属性との関係について調べ、質問紙法による評価法が他の二つの方法よりもソシオメトリックな指標と深く関係をもつよう 1モンの研究、(18) 関係をみたフレンチとメンシの研究などは最近にみられるこの方向の興味ある研究である。 の属性に関して友人を評価させ、 ナリティ シオ 自己評価法、インヴェントリー流の質問紙法、 法等が考えられた。 メトリー上の高い地位の者はハロー効果によってそのパーソナリティーを実際よりも良く評価されがちである。 1 評価の過程にハロー効果 同じく大学生を対象に、 リンドゼイとアーダンは、 その評価結果とソシオメトリー上の地位との関係について調べようとしたリーマ インヴェントリー流の質問紙法、 (halo effect) から生ずるパイアスが入る恐れがあるという難点をもっている。 独自に定めたパーソナリティーの属性とソシオメトリー上の地位、 S・C・T法の三通りの評価によって得られるパーソナリティ ソシオメトリー上の地位やクリークの構造等のソシオメトリックな プロジェクテイプ・テクニック、行動観察法、 しかし、この研究方向はパ 更に集団規節 即

べようとする研究も、 Test of Personality)を用いたグロスマンとライターの研究、 ソトリーを用いたバーロンの研究などがある。 Problem Check List) を用いたクーレンとプレッチの研究、カリフォルニヤ・パーソナリティー・テスト (California ソヴェソトリー流の質問紙を用いてパーソナリティーをスケッチし、 フレーミングの研究をかわきりに古くから試みられている。(8) 更に精神的な健康状態を調べるために作った独自のインヴ その結果とソシオメトリックな変数との関係を調 最近では、 ムーニーの問題照合表(Moc

明らかにしようとしたホルツベルグとポスナーの研究、ロールシャッハ・テストの諸変数と相互作用の型との関係を調べた(22) 集団成員の自己主張性を評価するためにT・A・Tを改良して作ったテスト)の得点とソシオメトリー上の地位との関係を 応とソシオメトリー上の地位との関係を調べており、その後には、A―S反応やP-五〇年近くになってからのことである。一九四七年にノースウェイとウィグドルが ピンスキー、 動因の隱在的側面を映し出すのに特に有効なプロジェクティヴ・テクニックが、 シゲー レ及びヴァナタの研究。(33 P-F研究の得点やT・A・Tの諸変数とソシオメト A—S反応やP—F研究 (Picture-Frustration Study この種の研究に利用され出したのは一九 ㅁ 1ルシャッハ・テストを用い、 リー上の地位との関係 その反

の結果と相互作用の型との関係を眺めてみた(個の研究が割に多く試みられていくように思える。 たリンドゼイとゴールドウィンの研究等がなされているが、その他にはあまり見当らない。(st) 佾、 われわれの研究でもS・C・TとT・ A・Tを利用し、 しかしこれからはこの それらテスト

(但し補足的研究にすぎなかったが)。

的な、 ターヴュー法を行動観察法と併せて採用し、成果をあげている研究にノースウェイの研究やジェニングスの研究初である。但し彼のは寮母とインターヴューをしただけで寮生のパーソナリティーをスケッチしてしまっている。 作用の型とパーソナリティーの関係を明らかにしようとしたものである。 ティーの差をインターヴューと行動観察とによって明らかにしようとしたものである。 各地位を占め、 インターヴュー 前者の研究はソシオメトリー上の地位が非常に低い生徒を、更に劣性児童 (recessive children)、 社会的な承認に興味をを感じない児童(socially disinterested children)、社会的承認を求める要求は強いが、 社会的に思わしくない反応を示す児童(socially ineffective children)の三種にわけ、それらの児童のパーソ それぞれの相互作用の型を示す児童のパーソナリティーを主にインターヴューの方法によって調査し、 法を採用し、 ソシオメトリックな変数とパーソナリティーとの結びつきを研究したのはリッチモ 後者の研究は、 ソシオメトリー 劣性児童では がみ このイ ンドが最 5 上の ナリ ts 攻擊

の結果とソ 秀な成績をおさめている生徒 【が作業中に犯す事故の頻数と工員のソシオメトリー上の地位との関係を調査している。また、「、ソシオメトリー上の地位と児童の社会的な粗相 (social accident) との関係を研究し、スペー、ソシオメトリー上の地位と児童の社会的な粗相 (social accident) との関係を研究し、スペー 研究もこの種の研究によく似たものである。 のソシ 上、 パーソナリティ ソ シ オメト オメトリックな諸変数とパーソナリディー オメト リー上の地位を調べたタギュリーの研究もこの種の研究の一つである。尚、(3)。 (3) リックな諸変数との関係をみようとしたいくつかの研究があげられる。 1そのものを直接的に測るのではなく、 (例えば立派な運動選手とか学業成績の優秀なものとか委員をやっているもの等)とその生徒 との関係を取扱った諸研究について極く簡略的に述べてみた。 パーソナリティーの間接的な表れと考えられる変数を測り、 ゲス・フゥ スペロッ フーラーとバウネは児童を対象 学校でなんらかの方面に優 フとケルは鉄工場の工 1. テストを 併用す そ

註 五 関係が交り合っている組織の網を探ろうとするテストである。 y 1 テストは抽象的な人間関係を取扱うテストではなく、 従って常に、 具体的場面に於いて人間相互の牽引 調査をしようとする集団の集団生活に

胜六 優劣なく一番の番号をつけるに値する親愛感を感じているだろうし、 べき方法として社会的交際の広さ(social-contact-range)を問題にした。即ち、多くの人々と広く交際している人によっ...................................(4) 番をつけさせ、 それによって選択の強度を表す方法は、 いて選択の強度を表した。しかし、この考え方も不自然な考え方である。交際範囲の広い人が必ずしも安定した強い選択を てなされる選択は比較的強度が強く、逆に、交際範囲の狭い人によってなされる選択は比較的強度が弱いという考え方に基 度の親愛感で選んでいるかも知れない。こんな場合、AにもBにも、 れると思わそる選択法を採用してみた。特に、予想の選択の採用は有意義だったと思われる。 するとは限らない。そこで、この調査では、 第一選択、 れなければならない。 順番の表す意味が全く相対的であるという欠点をもつ。例えば、 重要な機能を果していると思われるいくつかの具体的な場面をはっきりと設定し、 第二選択、 それによって選択の強さを表そうとすることは不自然である。ジェニングスもこの点を指摘し、これに代る 第三選択……というように、 いかなる選択基準を採用するかはソシオメトリー・テストの有効性にとって重要な意義をもつ。 単に選択を無制限にしたときに順位ずけが複雑になるという弊害がある だけ でな 本文に示したように、もう少し自然で、 好き(或は嫌い)の順に従って自分の表出した選択に順番をふらせ、 社交家のAは自分が好きとして選んだ友達の多くに、 自分の選んだ友達に無理に一番、二番、三番……の順 孤独を愛するBは自分の選んだ友達を殆ど四、 しかも選択の強さが割合によく投射さ それを選択の基準として発問がな (この点に関する詳細な記述 五番程

研究に用いられたり、ルンドバークとディクスンによって高等学変生走り人重曷系つ所をこう、ハニスのの、予想選択の考えは、一九四二年に既にモレノによって提唱され、その後、モーコールによってフランは関本昌秀の大学卒業論文「学級変動(学級編成替え)の変友関係並に地位に及ぼす影響の測定」を参照) analysis)」の名のもとに念入りに細工し、発展させたのはタギュリーであった。(3) スとリーヴィットによって海軍将校志願者の研究に用いられたりしてきた。(む) ルンドバークとディクスンによって高等学校生徒の人種関係の研究に用いられたり、(3) しかしこの方法を、 モーコールによってフランス陸軍の将校の 「関係分析(relational また、 ウイリア

胜七 位の決定要因とT・A・Tその他より見られる内的状況を一義的に結びつけて考えるのは理論的には問題が まえようとしているパーソナリティーの内的状況の層は行動面よりももっと深く、 T・A・Tの弁別力を調べる規準としてソシオメトリー上の地位をとって調べた結果よりみれば、ソシオメト 即ちソシオメトリーで摑まえている層は学級集団等の社会的場面における行動面が強いのに反し、T・ その層は互いに違っているので A・Tその他 ると IJ われ

関連は存在すると考えてもよいが、理論的には異質のものを側っていると考える方が無難だと思われる。関連は存在すると考えてもよいが、理論的には異質のものを側っていると考える方が無難だと思われる。(36) ことも理論的には考えうる。 又その集団にある集団規範(group norm) によっても地位は異ってくる。 か と考えられる。 内的状況が荒れていても社会的場面に於ける行動面では出来るだけ破掟をきたさないよう努めるといっ 故に、大まかな

註八 ターでは主に体育、 では、両種のスターの果す役割には、それ程明確ではなかったが、それでも幾分か差異がみとめられた。即ち、不安定型ス 異った役割を果しているかをゲス・フゥ・テスト(guess who test)を用いて明らかにしようと試みた。 表す相互作用の型と選択される理由とに基いて安定型スターと不安定型スターを抽出し、両者が学級活動に於てどのように て大分違ってくる。この調査で、両種のスターの間にはっきりした役割の差異が見出されなかったのは、その意味で、寧ろ 慶応高校の調査らしい結果が出たとも云いうるのではないだろうか。 一というような面で指導的立場に立っていた。尙、両種のスターの学級に於て果す役割は、 この調査はあらたに慶応義塾高等学校一、二年生を対象に行われた。先ずソシオメトリック・テストを実施し、 リクリエーションの面で学級の指導的立場に立つのに対し、安定型スターは学術的面とか学級の秩序統 その学級のもつ集団規範によっ この研究の結 各生徒

文 獣

- 1 Barker, R.G. The social interrelations of strangers and acquaintances. Sociometry, 1942, 5, 169-179
- 2 sixth-grade girls. Sociometry, 1951, 14, 32-42. Baron, D. Personal-social characteristics and class-room social status: A sociometric study of fifth-and
- m Bogardus, E.S. Introduction to social research. 1936.
- Chapin, F.S. Contemporary American institutions. 1935.
- 5 Crisswell, J. H. Racial cleavage in Negro-white groups. Sociometry, 1937, 1, 81-89
- 6 Crisswell, J. H. A sociometric study of race cleavage in the classroom. Arch. Psychol., No. 235, 1939
- 7 Dodd, S.C. A controlled experiment on rural hygiene in Syria. 1934.
- 8 Flemming. G. A factor analysis of the personality of high school leaders. J. appl. Psychol., 1935, 19, 597-605.
- 9 French, R. L., & Mensh, I. N. Some relationships between interpersonal judgments and sociometric status

- in a college group. Sociometry, 1948, 11, 335-345.
- Sociometry, 1951, 14, 210-225. Fuller, E. M., & Baune, H. B. Injury-proneness and adjustment in a second grade: A sociometric study.
- and personality amongst sixth-grade children. Sociometry, 1948, 11, 346-355 Grossmann, B., & Wrighter, J. The relationship between selection-rejection and intelligence, social status,
- Holzberg, J.D., & Posner, R. The relationship of extrapunitiveness on the Rosenzweig Picture-Frustration
- Study to aggression in overt behavior and fantasy. Amer. J. Orthopsychiat., 1951, 21, 767-779 Jenkins, J.G. The nominating technique, its uses and limitations. Amer. J. Psychol., 1947, 2, 433. (Abstract)
- 4 Jennings, H. H. Leadership and isolation. 1943.
- 15 Jennings, H. H. Sociometry in "Encyclopedia of psychology." ed. by Harrimann, P. H., 1946, 874-877.
- 16 Jennings, H. H. Leadership and sociometric choice. Sociometry, 1947, 10, 32-49
- 17 10, 122—132. Kuhlen, R.G., & Bretsch, H.S. Sociometric status and personal problems of adolescents. Sociometry, 1947,
- 18 ratings. Sociometry, 1952, 15, 7-90. Lemann, T.B., & Solomon, R.L. Group characteristics as revealed in sociometric patterns and personality
- 19 G., 1954, 405—448. Lindzey, G., & Borgatta, E. F. Sociometric measurement in "Handbook of social psychology" ed. by Lindzey,
- 20 Lindzey, G., & Goldwyn, R. Validity of the Rosenzweig picture-frustration study. 1954, 22, 519-547.
- Lindzey, G., & Urdan, J. A. Personality and social choice. Sociometry, 1954, 17, 47-63
- Loomis, C. P. & Davidson, D. M., Jr. Sociometrics and the study of new rural communities. Sociometry, 1939,
- 23 Lundberg, G. A., & Dickson, L. Inter-ethnic relations in a high-school population. Amer. J. Soc., 1952, 58, 1—

- 24 Lundberg, G. A., & Steele, M. Social attraction-patterns in a village. Sociometry, 1938, 1, 375-419.
- 25 California. Harvard business reasearch studies, 1944, No. 32. Mayo, E., & Lombard, G. F. F. Team-work and labour turnover in the aircraft industry of the Southern
- 26 Maucorps, P.H. A sociometric inquiry in the French Army. Sociometry, 1949, 12, 46-80.
- 28 27 Moreno, J. L. Sociometry in action. Sociometry, 1942, 5, 298-315. Moreno, J. L. Who shall survive ?: A new approach to the problem of human interpretation, 1934
- 29 Moreno, J. L. Contribution of sociometry to research methodology in sociology. Amer. soc. Rev. 1947, 12, 287
- 30 Newcomb, T.M. Personality and social change. 1943, chap. 8, 9, 14 & 5
- 31 mates. Sociometry, 1944, 7, 10-25. Northway, M. L. Outsiders: A study of the personality patterns of children least acceptable to their age
- 32 Sociometry, 1947, 10, 186-199. Northway, M. L., & Wigdor, B. T. Rorschach patterns related to the sociometric status of school children.
- 33 abnorm. soc. Psychol., 1952, 47, 415-419. Pepinsky, H.B., Siegel, L., & Vanatta, E.L. The criterion in counseling: A group participation scale. J.
- 34 published in Sociometric Review, 1936, 41-49) Richmond, W. Sociometric tests in a training school for nurses. Sociometry, 1950, 13, 29-38. (Originally
- 35 Roethlisberger, F., & Dickson, W. T. Management and the worker. 1939.
- 36 佐野勝男、槇田仁、日本版TATの研究(其の一)―臨床的使用法とテストパツテリーに於ける位置―精神医学研究所業績 第二輯、1955, 83-136
- 37 学卒業論文 関本昌秀、 学級変動(学級編成替え)の変友関係並に地位に及ぼす影響の測定―ソシオメトリーによる一研究― 1953 (大
- 38 Speroff, B., & Kerr, W. Steel mill "hot strip" accidents and interpersonal desirability values. J. clin.

Psychol., 1952, 8, 89-91.

- Sociometry 1952, 15, 91-104. Tagiuri, R. Relational analysis: An extension of sociometric method with emphasis upon social perception.
- Whyte, W.F. Human relations in the restaurant industry, 1948, chap. 4-10.
- Whyte, W.F. The social structure of restaurant. Amer. J. Sociol, 1949, 54, 302-310.
- 1947, 11, 283-291. Williams, S. B., & Leavitt, H. J. Group opinion as a predictor of military leadership. J. consult, Psychol.,